

看護基礎教育におけるコロナ禍での臨地実習の意義

THE SIGNIFICANCE OF CLINICAL PRACTICE IN BASIC NURSING EDUCATION DURING THE COVID-19 CRISIS

菅 原 尚 美 ・ 真 溪 淳 子 ・ 坂 村 佐 知
SUGAWARA Naomi, MATANI Junko, SAKAMURA Sachi,

山 本 和 江 ・ 末 永 カツ子
YAMAMOTO Kazue, SUENAGA Katsuko

キーワード：看護基礎教育，新人看護師教育，臨地実習，コロナ禍，協働

Key Words：Basic Nursing Education, Education for Newly Graduated Nurses, Clinical Practice, COVID-19 Crisis, Collaboration

I. はじめに

2022年1月現在、国内のコロナ禍の状況は、第5波が落ち着いて3か月経過し2021年の年末からオミクロン株が猛威を奮う「第6波」の最中にあり収束の見通しは立たない。

このような中で、2022年1月25日、宮城県看護系大学・短大合同協議会（以下、会）のミーティングがZoomで開催された。会は、県内の看護系大学教員と看護協会及び行政担当者で構成されている。会での共通の危惧は、学生の臨地実習の中止・短縮の問題であった。

ミーティングでは、大阪府看護協会が作成した「コロナ禍において安全で安心して臨地実習を実施するための基本指針」（2021年3月22日）〔1〕が共有された。そのうえで、会としても「実習を止めない」ための検討が必要ではないかとの課題

が提示された。1月27日、急遽、時間を確保できた筆者らは、上記の課題についてフリーディスカッションを行った。ディスカッションでは、コロナ禍での本学での臨地実習の展開を振り返りながら今後の実習施設と大学との連携のあり方などを話し合った。

そこで本稿では、看護基礎教育における臨地実習の定義と位置づけと2020年4月以降の臨地実習の動向等を確認し、上記のディスカッションの内容を質的に整理し若干の考察を加え報告する。

II. 看護基礎教育における臨地実習の定義と位置づけ

看護基礎教育は、専門化し高度化した医療に対応できる能力と地域・在宅における看護に対応できる実践能力の基礎づくりが求められる。専門学校、短大、大学といった教育機関において一定の

トレーニングを積んでから国家試験受験資格を取得する。そして、免許を手にした後も継続して自己研修や組織の研修や先輩の指導を受けながら実践経験を重ね実践能力を高めていくことが求められている。

これまで看護基礎教育における臨地実習の指針になってきたのは、「看護実践能力の育成」に焦点をあてて検討された「看護学教育の在り方に関する検討会報告書（平成14年3月26日）」である〔2〕。

【臨地実習の定義と位置づけ】

「看護職者が行う実践の中に身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。この学習過程では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する。学生は、対象者に向けて看護行為を行い、その過程で、学内で学んだものを自ら実地で『使う』『実践できる』段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程である」

Ⅲ. コロナ禍での臨地実習をめぐる動向

コロナ禍は看護学生たちを苦境に立たせた。看護実践能力を身につけるために不可欠な臨地実習が2020年4月から中止または短縮を余儀なくされたからだ。

1. マスコミの報道より

以下は、2020年4月以降の半年間の臨地実習に関わる動きが理解できる毎日新聞ニュースサイト（2020年10月10日配信）による報道の一部である〔3〕。

- ・2020年4月以降の感染拡大防止措置として病院実習が中止となっていること
- ・文科省が病院や介護施設などで行う臨地実習の学内代替を認めたこと
- ・多数の学生が未来の看護師としてのスキルに自信を持てなくなっていること
- ・教育の間では代替教育の中で様々な工夫が行われていること
- ・日本看護系大学協議会の調査では、7割以上の大学で臨地実習が中止になったこと

- ・8月に厚生労働省、9月に自民党の看護問題を検討する小委員会の要望書を提出したこと（この2つの要望書での要望内容と国の対応をⅢ-3に示す）
- ・要望内容は新人看護師に臨地実習を補う新人看護師研修を実施すること
- ・新人看護師研修は保健師助産師看護師法に基づき病院などの努力義務となっていること

2. 全国の看護基礎教育機関による実態調査

日本看護学校協議会共済会と日本看護系大学協議会が2020年度の新型コロナウイルスの教育現場への影響を調査した報告書を公表している。

日本看護学校協議会共済会の報告書（2020年2月16日）〔4〕によると、調査は、看護学校や看護大学等の「看護職養成校」1017校を対象にアンケートを実施、731校から回答を得ている。その結果、96.6%の養成校が病院での臨地実習を病院側から断られた経験があり、臨地実習ができて57.6%は学生の学修成果が例年に比べ減ったと回答したとしている。

3. 新人看護師研修の実施に向けての動き

日本看護系大学協議会が、厚生労働省（2020年8月）と自民党（2020年9月）に新人看護師研修の支援に関する要望書〔5, 6〕を提出した。病院等で「努力義務」とされている新人看護師の研修を新型コロナウイルス感染症の影響が落ち着くまでの当分の間は、臨地実習での体験を補うという意味で新人看護師研修を必修化するという要望となっている。具体的な要望事項として、看護学教育の質の担保に向けた教育環境整備への助成や新人研修の充実に向けた予算の確保等が挙げられている。

この要望に対して国は、厚生労働省医政局看護課より、各都道府県衛生主管部（局）宛てに「令和3年度新人看護職員研修の実施について」（2021年12月23日）〔7〕を発出し、「新型コロナウイルスの影響に係る看護職員卒後フォローアップ研修事業」を予算化したことを通知した。通知は、

事業の実施にあたり、各都道府県においても必要な予算を確保し、事業の実施にあたっては看護学校養成所等との連携をお願いするということであった。

Ⅳ. フリーディスカッションを実施して

教員5名でコロナ禍の臨地実習を振り返り、臨地実習の現状や実習施設と大学との連携のあり方についてディスカッションし、録音した音声データの逐語録を作成した。研究者3名により「コロナ禍での臨地実習の現状と今後のあり方」を表す記述を抽出し、意味内容の類似性に基づきカテゴリ化した(表1)。またKH Coder3による定量テキスト分析を行った(表2)[8, 9]。

抽出語から、実習施設と大学との連携について語られた「キーワード」として、「関係」「責任」「信頼」「コミュニケーション」「一緒」「役割」「新人」「繋がる」に着目し、《カテゴリ》〈サブカテゴリ〉との関連を考察し、関連を裏付ける具体的な“語り”を示す。

1. 《相互理解のための場の不足》と「関係」「信頼」との関連

「関係」「信頼」は、実習施設と学校、臨床の看護師と教員との関係性として語られており、〈実習指導者と教員との会議や打ち合わせの機会がなくなった〉〈臨地実習中止の連絡が文書やメールで届く〉ことと関連していると考えた。

“現場（病院）に来たときに食い込んで話せるというのは、やっぱりお互いの関係性が築けているからかなって”

“学校ではどうなのって少し切り込んできたりとか。お互い関係が築きやすかったかなと。今はなんか細切れの人間関係になっているような気がして”

2. 《コロナ禍の臨地実習の振り返りと気づき》と「コミュニケーション」との関連

「コミュニケーション」は、実習施設と大学、看護師と教員がコロナ禍のような危機的状況における対面のコミュニケーションが減少することの限界（マイナス面）と、日常的にコミュニケーションを図り、関係性を築くことが重要であることの気づきが得られたと考えた。

“日常のコミュニケーションの大切さとか。根拠とするもの、大事にすることをお互い情報共有していることが大事”

“コミュニケーション、信頼あたりがあると。困ったときに話し合える基盤だよね。どんな課題でもとにかく投げ掛けて、お互いに意見交換できる相手がいるって”

3. 《継続教育に向けた実習施設との連携・協働への期待》と「一緒」「繋がる」「新人」「責任」との関連

「一緒」「繋がる」を含む以下の語りは、基礎教

表 1. コロナ禍での臨地実習の現状と今後のあり方

カテゴリ	サブカテゴリ
相互理解のための場の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・日ごろから忙しさを理由に顔を合わせる機会を持たない ・実習指導者と教員との会議や打ち合わせの機会がなくなった ・臨地実習中止の連絡が文書やメールで届く
コロナ禍の臨地実習の振り返りと気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設と顔を合わせたコミュニケーションが必要である ・実習指導者と共通目標を共有し合い役割分担を行う ・コミュニケーションを通して顔が見える関係づくりと相互理解を深める
継続教育に向けた実習施設との連携・協働への期待	<ul style="list-style-type: none"> ・学生も大学も実習施設も臨地実習を継続したいと考えていることがわかった ・継続教育の目標を共有し信頼関係を構築する ・実習指導者と教員がパートナーシップを発揮して継続教育を担っていく

表2. ディスカッションの中で出現回数が5回以上の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
病院	39	前	10	研究	6
実習	33	捉える	10	考え方	6
教育	31	働く	10	受け入れる	6
看護師	25	臨床	10	状況	6
学生	23	感染	9	中止	6
教員	21	組織	9	病棟	6
分かる	20	相手	9	不思議	6
先生	18	役割	9	変わる	6
大学	18	話	9	お願い	5
関係	17	レベル	8	スタッフ	5
現場	17	学校	8	ダメ	5
違う	16	患者	8	プロセス	5
聞く	16	基礎	8	リスク	5
責任	15	決まる	8	感じ	5
会議	13	困る	8	議論	5
考える	13	指導	8	繋がる	5
信頼	13	持つ	8	見る	5
コミュニケーション	12	守る	8	少し	5
研修	12	新人	8	場	5
お互い	11	大事	8	知る	5
医者	11	社会	7	当たり前	5
判断	11	生涯	7	日常	5
コロナ	10	立場	7	必ず	5
一緒	10	話す	7	必要	5
今	10	やり取り	6	連絡	5

育での学びが不十分となっていることを理解し、実習施設と大学、看護師と教員とが一緒に繋がり新人として就職する学生を「一緒に」「つながり」育てていくという共通の思いとなっていると考えた。

“意識として、一緒にこの学生たちを育ててるんだという感覚をどこで持ちうるかっていう”

“病院で働いている方としては、一緒に働くことになるかもしれない学生にちゃんと実習で知識とか演習の集大成とか統合してもらいたいとか、リアリティーショックを少しでも小さくして欲しいなって”

“日頃から現場の人たちと私たちが繋がって、話し合っ。だから実習ができるってことじゃないかも知れないけれども、せめてそのプロセスは”

「新人」「責任」を含む以下の語りは、コロナ禍という感染のリスクがある中での実習の実施や、看護教育の責任について語られ、学生を将来ともに働く看護師として捉えて育てたいという〈実習指導者と教員がパートナーシップを発揮して継続教育を担っていく〉思いとして語られていると考えた。

“学生のことも守らなくてはならないし、かといって責任を取るのは結局学生が感染したり学生が感染源になった時の責任の所在っていうのが、病院で働いてるとそこが一番なので”

“A病院は（臨地実習を）止めるのを自分たちの責任だと思って（臨地実習を）受けたって”

“一度も実習に行かなかった新人とほぼ実習に行けた新人がいて。臨床に来たときの、違うっていう言い方をされていて。とっても困った状況だったんだなって”

“コロナで来れないってなったら、あー新人研修の中身を組み立てないって思ったり”

V. 考察

臨地実習の中止や短縮により、大学は学生が学内で学んだことを『使う』『実践できる』段階まで十分に到達させることができず、また多くの学生は未来の看護師としてのスキルに自信を持てないまま卒業しなければならなかった。

「はじめに」で述べたように、宮城県看護系大学・短大合同協議会が「実習を止めない」ための検討を始める動きや、Ⅲで示したように2020年4月以降の臨地実習をめぐる動向は、継続教育の課題を臨床側と大学側とが共に理解し解決しようという大きな動きとなっていることは明らかである。

以下では本研究を通して臨地実習の意義を再確認し、実習施設と大学の連携の在り方について考察したい。

看護系大学の4年生が「新型コロナウイルスナースたちの現場レポート」[11]に記事を寄せた。「ケアを行ったときの患者さんの表情や言葉だけは、オンライン実習ではどうしてもわからない」、「温かいタオルで背中を清拭されているときの気持ちよさそうな表情」など患者の反応や変化を間近にすることで、「自分のなかの“知識としてのケア”が、“看護としてのケア”になる瞬間が生まれる」とし臨地実習の価値を実感していた[11]。臨地実習は看護学生にとって「“尊い時間”」である[11]。教員はコロナ禍の経験から学び、今後の看護基礎教育の在り方を検討し学びを止めない手立てを見出す必要がある。

コロナ禍での臨地実習の中止は、実習施設と大学とのコミュニケーションの機会の喪失でもあった。コロナ禍以前は、臨地実習に先立ち病院連絡会議や事前打合せと称し、双方が実習について共通理解する目的で開催される、欠かせないコミュニケーションの機会があった。この会議や打合せの場は、実習指導者にとっても、実習の到達目標や学生の学習状況を確認したり情報共有する手段ともなっていた[12]。

「コミュニケーション力」の著者である斎藤は、コミュニケーションを「感情」と「意味」で説明している[13]。「感情」と「意味」の双方がやり取りできているとコミュニケーションが良好な状態と言え、反対にどちらもやり取りできていなければコミュニケーション不全と考える。「意味」だけをやり取りするのは仕事の場面で見られる[13]。病院連絡会議で実習要項に沿って実習の概要を説明することや、実習施設から臨地実習受け入れ困難の文書やメールが届くといったやり取りは、一見情報交換だけのやり取りに見える。情報だけのやり取りは伝えたい「意味」を相手がしっかりと受け取っているとは限らず、それが認識のズレとなることがある。しかし斎藤は、重要なことはズレを認識し微妙に調整していくプロセスを共に踏むことで信頼関係が強まっていくことであるとし、「おっしゃっていることは、…ということですね」という確認が重要だと述べている[13]。

臨地実習の中止や短縮は、感染リスクの回避を共通項に持ちながら、実習施設は患者に対しての、大学は学生の教育に対しての責任を担い、それぞれの基準や考え方に従って判断されていたと考える。しかし、中止や短縮の決定に至る過程は、ほとんど共有されて来なかったと言える。ディスカッションであらためて確認したことは、看護基礎教育への責任を果たすべく臨地実習を引き受けたいという実習施設も存在していることだ。コロナ禍となり2年が経過したが、臨地実習中止の文字に疑問を持つこともなく、仕方が無いと納得しているだけで良いのだろうか。対面でのコミュニケーションの減少は認識のズレを生む。今こそ実習施設と大学とが対話を通して相互理解を深め、真に協働・連携するチャンスではないかと考える。

認識のズレはコロナ禍に限ったことではない。実習指導者と教員のコミュニケーションも、最初から完全に互いを理解し的確に「意味」を認識できるとは言えない。こうした実習指導者と教員とのズレは、互いが毎日顔を合わせて確認できれば少しずつ修復されていくのだと考えられる。このズレを修復し調整するプロセスがまさに連携・協

働であると言える。臨床側と大学側とが“少し切り込んで”話せるような関係性が築かれていると話しやすいという教員の経験は、ズレを修復するプロセスを共に踏むというコミュニケーションの積み重ねから生まれた信頼関係とも捉えられる。

森永らは、保健師業務要覧の保健師の教育とキャリア開発の項で、介護施設等における感染対策での保健師の役割について、「行政と施設が連携を図る体制を構築する必要」があり、現場に足を運び、「顔の見える関係」で施設職員の不安や困り事を共有することが重要だと述べている[14]。

With コロナの新時代では、エビデンスに基づく感染防止対策を講じながらも、「顔の見える」コミュニケーションを図り、実習施設と大学との連携・協働の道筋を模索していく必要があると考える。

Ⅵ. 研究の限界と課題

本研究は教員5名の発言をもとにしており、結果の客観性には限界がある。また、今後は実習施設と大学の連携・協働の実現に向けて、双方が参加したディスカッションが必要であると考ええる。

Ⅶ. おわりに

フリーディスカッションを通して、筆者らは、看護学生、臨床の看護師、教員の三者はともに臨地実習の実施を望んでいること、看護師を共に育てるには実習施設と大学がそれぞれの立場で連携・協働を図る必要があること、実習指導者と教員との「顔の見える」コミュニケーションを通して信頼関係を構築していくことの重要性を認識した。

コロナ禍は臨地実習というかけがえのない経験や、コミュニケーションの機会を奪ったが、一方で、我々に看護基礎教育における臨地実習の意義をあらためて問い直す機会をもたらしたと言える。これからも続く With コロナの時代を見据え、看護教育という共通の目標に向かって実習施設との協働を目指していきたい。

文 献

- [1] 大阪府看護協会ホームページ コロナ禍において安全で安心して臨地実習を実施するための基本方針
<https://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf>
(2022年1月30日引用)
- [2] 文部科学省ホームページ 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて（平成14年3月26日看護学教育の在り方に関する検討会報告書）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm
(2022年1月30日引用)
- [3] 毎日新聞ニュースサイト「コロナ世代と呼ばれる？」病院実習相次ぎ中止、悩める看護学生たち
<https://mainichi.jp/articles/20201009/k00/00m/040/297000c>
(2022年1月30日引用)
- [4] 一般社団法人日本看護協議会共済会ホームページ 看護職養成校の新型コロナウイルス（COVID-19）感染拡大への対応に関する調査集計概要～臨地実習とICT関連授業の扱いを中心に～（ニュースリリース（初号））
http://e-kango.net/images/top/20210216_report.pdf
(2022年1月30日引用)
- [5] 日本看護系大学協議会ホームページ 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により臨地実習に影響を受けた令和3年度新人看護職研修の支援に関する要望書
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/08/youbousyo-MHLW20200825.pdf>
(2022年1月30日引用)
- [6] 日本看護系大学協議会ホームページ 要望書
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/>

uploads/2020/09/2020FormalReq.pdf

(2022年1月30日引用)

- [7] 日本看護協会ホームページ 令和3年度新人看護職員研修の実施について
https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20210301newnursetraining_reference.pdf
 (2022年1月30日引用)
- [8] 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して(第2版)．ナカニシヤ出版，京都，2020.
- [9] 末吉美喜：テキストマイニング入門：ExcelとKH Coderでわかるデータ分析(第1版)．オーム社，東京，2019.
- [10] 筒井早希，紀平由起子，菱沼典子：新型コロナウイルス感染症流行下（令和3年度）における新人看護職員研修－三重県内の看護管理者へのアンケートから－．三重県立看護大学紀要．2021；特別号：31-38.
- [11] 古田翔平：“虚無感”を越えて，新型コロナウイルス ナースたちの現場レポート（第1版）．日本看護協会出版会編集部（編，日本看護協会出版会，東京，2021，pp.668-671.
- [12] 馬場好恵，中島真由美：看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携．聖泉看護学研究．2020;9:11-18.
- [13] 齋藤孝：コミュニケーション力（第1版）．岩波書店，東京，2018，pp.2-8.
- [14] 森永裕美子，坪川トモ子：地域マネジメントとしての医療・福祉の安全管理，新版保健師業務要覧（第4版）．井伊久美子，勝又浜子，森永裕美子，他（編，日本看護協会出版会，東京，2022，pp.120-125.

